

# ～名画との対話を楽しむ～堀美術館

文化のみに、新しい見どころが誕生した。昨年6月にオープンした「堀美術館」。一步足を踏み入ると、吹き抜けの広々とした空間に昭和を代表する洋画家の、それも美術の教科書にのっているような名品がずらりと並ぶ。主税町に本社のある情報処理会社「ダイテック」創業者で、これらの作品を十数年に渡って収集してきた堀誠館長に、ご案内いただいた。

撮影 木村一成



「最初は美術館を造ろう、などという大それた気持ちはありませんでした。ただ、自分の集めてきた絵画を死蔵しているよりは、同好の士に見ていただければ、と。」

コレクションの中心は佐伯祐三、梅原龍三郎ら、1910～30年代頃に渡欧し西洋絵画のエッセンスをむさぼるように学んだ、西洋画のパイオニアたちの作品だ。

「野心を持ってパリに渡ったものの、夭折した画家もいます。それぞれの作品とともにその人生をたどると、また興味深いものがありますね。」



現在展示してあるのはこれら渡欧組に加えて、シベリアに抑留され画材もない中でも消し炭(チャコール)で描き続けた香月泰男や、晩年はほとんど外出せずに自宅の庭で虫や草花をじっと何時間も眺めて描いたという熊谷守一の作品など、四十数点。二階の一部屋には、尾西(現在の一宮市)出身の三岸節子の作品も並ぶ。ヘッドフォンを借りて、絵の解説を聴きながら鑑賞することもできる。

静寂の中で名画と向き合っていたら、時のたつのを忘れてしまいそうになった。今度はたっぷり時間をとって、と思いながら美術館を後にした。(取材 兼松はるみ)

## 文化のみち物語 その四

### 堀美術館DATA

- 住所 名古屋市東区主税町4-4-2
- 開館時間 11:00～17:00(入館は16:30まで)
- 休館日 土・日曜、祝日、資料整理日、年末年始 ※11月3日(文化の日)は開館
- 観覧料 一般 1,000円、高大学生 500円  
小中学生 300円  
20名以上の団体 800円(要予約)  
障害者手帳所持者 500円
- 問い合わせ先 052-979-5717

## 書庫棟より



「文化のみち二葉館」の文学ボランティアに参加して二年ほどになる。春日井建関係の蔵書整理をお手伝いするためである。

二葉館に足を運ぶたびに、私には新しい発見がある。思わぬ本や雑誌に春日井先生が文章を書いておられたりする。また書庫に足を踏み入れると、初版本の『未青年』をはじめ、塚本邦雄の『水葬物語』や『日本人霊歌』(いずれも著者署名入りの謹呈本)、オスカー・ワイルド『サロメ』の原書本など、春日井ファンなら垂涎的となるような「お宝」に出会うことがある。

先生の亡きあと、私は友人たちと創刊した歌誌「井泉(せいせん)」に先生の評伝を連載しているのだが、二葉館の蔵書にはそれを書く

ための不可欠な資料がずらっと並んでいる。まだ幾箱も開封していない蔵書入のダンボール箱があり、その中に何が入っているかは開けてみないとわからない。「短歌」誌の編集部員として春日井邸に出入りしていたころ、一室まるごとが書庫という薄暗い部屋をのぞかせてもらったことがあるが、あの蔵書の大半がこの二葉館に来ているのである。次回の蔵書整理が楽しみでならない。

黄ばみたる誌面に若き君はゐて  
ドライ・アイ病むわが眼うるほす

文学ボランティア 岡嶋憲治



## 「二葉館」周辺の文学 ～名古屋ゆかりの文士たち～

三田村博史 中部ペンクラブ会長

上:左が三田村博史会長  
地図:明治5～大正15の文化のみち界隈  
『山吹ものがたり』より

士族町から富裕層、貿易商の住居地に変わったこの周辺は、金城、明倫、東海、県立高女などが設置され、多くの文学人が出ている。

「主税町四丁目」の地籍表示が昔と変わりなければ、今、駐車場となっているあたりー文化のみち二葉館からふた筋ほど北へ行ったところに大正期、モダニズムの詩人・春山行夫、井口蕉花(しょうか)が住んでいた。近くに宮沢賢治を世に出し棟方志功とも親しかった一宮出身の佐藤一英もおり、大津橋の高木斐瑳(あおきし)は西脇順三郎たちの新しい詩運動のさきがけとなった。春山、井口の実家は陶器製造に関わっており、井口は早世したが、春山は後に東京に出て編集者、民俗研究家としても大成する。「話の泉」のレギュラーもつとめた。

白壁筋の日本料亭・加茂免の前には今、キリスト教関係の建物が立つが、ここには昭和5年プロレタリア文学に対抗してつくられた「新興芸術派倶楽部」の中心人物・久野豊彦の実家があった。敷地4千坪、長屋門、芍薬畑、竹藪に囲まれて育った久野は一時期、川端康成とも競った。叔父・芳三郎はカリフォルニア大学でサイデンステッカーやドナルド・キーンを教

え、もう一人の叔父・寧は発汗生理学で文化勲章を受けている。

第4回芥川賞を「地中海」で受けた富沢有為男(ういお)は東海中学から美校へ進み「新愛知」(中日新聞の前身)の漫画記者として短期間戻ってきた。また後輩の牧野吉晴は小川町に育ち、戦後、空手小説で売れた作家だが、関東大震災直後には師匠である金子光晴を連れて当時清水町にあった牧野宅に避難してきている。長塚町には後に塩津村長(現蒲郡)となった探偵小説の桜田十九郎も住んでいた。

大津橋の愛知英語学校へ坪内逍遙、二葉亭四迷が通い、西二葉町の中へ野口米次郎、佐々木味津三が通った。プロレタリア作家・葉山嘉樹は労働運動に関わって大須門前署に逮捕、新築なつたばかりの今の市政資料館の監房にも留置されたであろうし、ちょっと周辺を広げると栄で江戸川乱歩は育っている。

◆11月3日「文学講座」でのお話を要約していただきました。二葉館では、これからこの白壁界隈を闊歩していただろう文学者たちについて、企画展などでとりあげてゆきたいと考えています。乞うご期待。